

■国際協力活動

□WNU(世界原子力大学)夏季研修に原産協会職員が協力、「福島」が話題に

2011年の世界原子力大学(WNU)夏季セミナー(SI)は、英国の大学都市オックスフォードが開催地です。今年は「福島」も大きな話題になりました。事故そのものへの関心、我が国、自らの国でのインパクトに多くの参加者(フェロー)が深く関心を持ち、我が国から参加のフェローも自らの体験を紹介するなど、従来以上に活動的に輪に入る姿を目にして「日本の国際化」に頼もしい希望を感じました。開講第一週の現地からの報告です。(メンター小西俊雄職員記)

今年の夏季セミナーは、7回目。3月の「福島」以降、何らかの話題になるだろうと予想して、参加のフェローに「自分の目で見た『福島』を語れる心構え」をアドバイスしていました。「自分の目で」が他のフェローに関心と親近感を持たせる好手段と考えたからです。

当初予定していなかったメンター役(研修運営をサポートするシニアグループ)の一員を急遽続けることになった5月以降、「『福島』をどう取り上げるか」とロンドンの研修運営事務局からの相談を受けてプログラム構成を調整して来ました。事務局では、例年第一週に取り上げる【Global Setting】の中に位置づけていました。原子力発電や原子力安全の一課題ではなく、「グローバル」な視点で考えさせよう、との意図でしょう。

結局、全体を「『福島』の教訓は何なのか?」【What should we learn from Fukushima?】として「皆で考えよう」とのメッセージにしました。中身は「1. 何か起きたのか、その概要」【What happened?】、「2. 直接のインパクト:日本では?世界では?」【Immediate Impacts】、「3. 国の対応と今後のアクション」【Government Responses】、「4. 実体験他」【Real Experiences】の4構成とし、1. では事故の経緯と現状、2. では主として市民や産業界におけるインパクトの概要を紹介しました。何れもWNAスタッフの力も借りて、技術的な内容、海外諸国での概要を入れました。3. では主として政府の対応と今後の課題を概観し、今後国際的に取り組まねばならないとする意見を紹介し、最後の4. では身近の経験として、3人の日本人フェロー、避難生活を送る「原子力屋」の経験談、私自身の今の受け止め観を述べた後、全体の意見交換という流れになりました。

技術的には原子力発電国を中心に、私よりもよく事態を把握理解しているフェローがいて、討論に参加してくれました。例えば「2号機の建物だけがなぜ壊れなかったのか」と私自身が理解していなかった疑問について、カナダのフェローが現場写真を紹介して解説してくれました。「海側から見た建物写真」で、私の調査からは漏れていました。

3人のフェローは、自らの経験、所属組織の関与を紹介してくれました。本人たちにとっても良い発表の機会ではなかったかと思っています。「福島」は最初の週でしたから、第2週以降に好影響が残るのではないかと期待しています。

諸国でのインパクトの詳細は紙面上余裕がありませんが、外からとかく「見えにくい」と言われる日本の状況をモニターするのに、メディア以外では「東電」「原産協会」のホームページが役立った、との声を多く聞き、産業界としては努力していると自負心、安心感を覚ええました。

例年、「特定の課題を議論する小集団(Forum Issue Group)」で関心を共有するフェローが集まって調査から発表会に至ります。今年は「福島」をこの課題の一つにすることも当初検討されましたが、多くの分野で教訓があるはず、との立場から独立のグループは作らず、それぞれの課題の中でその関連を取り上げる形になりました。世界の若者が、どんな目で、どんな教訓を得ようとしているか、その結果が楽しみです。



果が出て来るように思います。

以下週単位に「原子力産業」、施設訪問を挟んで「安全、放射線防護」「広報、原子力経済、国際法」「原子力教育と知識管理」「原子力知識管理、課題検討発表会」と続きます。議論を通して青年たちは各分野の今の課題を知り、他の若者の視点、考え方を知り、自分の国を見直し、自分自身の将来像、課題を見つけて行くのでしょう。

・世界原子力大学(WNU)夏季セミナー(SI)について
http://www.jaif.or.jp/ja/wnu_si_intro/index.html
 ・世界原子力大学(WNU)ホームページ
http://www.world-nuclear-university.org/default.aspx?ekfxmen_noscript=1&ekfxmensenl

夏季研修では気候変動問題から人材育成まで、原子力を取り巻く広範な課題を世界の100名近くの若者が6週間、生活を一緒に過ごして共に考え英語で議論します。夏季セミナーの最大の狙いは、「知識修得」ではなく「課題を議論するプロセスを学び」「人の輪を広げる」ことにあります。英語環境における小グループでの討議を通して、議論への加わり方、主導の仕方、協力作業の進め方、プレゼン手法などを実習することは、日本人の若手には極めて向いている研修だと思っています。

日本からは原産協会「向坊事業」で支援を受けた3人が参加しました。今後はそれとは別に各組織から直接参加のフェローも増えて、より多くの「国際感覚ある若手原子力屋」が育つことを期待しています。

例年、他国に比べ「立ち上がりが遅め」と感ずる日本人フェローも、「福島」が幸いして最初から皆との交流が始まり、早く立ちあがったようです。出発前に、前年までの経験者から入手したノウハウも利いているでしょう。今後の参加が継続すれば更に効

